

■台湾発着および台湾寄港する客船



前後泊ありでプランを立てたい
●スーパースター・アクエアス
(スタークルーズ)
基隆が母港で、今年11月からは無寄港で1泊から参加できるクルーズも。日程が短いので、前後泊で台湾を十分に楽しんで、旅程が長くならない。



チャーターで気軽に台湾!
●セレブリティ・ミレニアム
(セレブリティクルーズ)
過去にも横浜からの片道クルーズなどで台湾に寄港実績がある。2017年GWはクルーズプラネットとH.I.S.のチャータークルーズで基隆に寄港予定。



おなじみの台湾周遊クルーズ
●ダイヤモンド・プリンセス
(プリンセス・クルーズ)
2017年の日本発着も、那覇、石垣島とセットで基隆や高雄などをめぐりリゾートクルーズを中心に台湾寄港のコースが多数。詳細は18ページをチェック!



定番商品として人気
●飛鳥II
(郵船クルーズ)
毎年恒例の「南西諸島・台湾クルーズ」で今年も基隆への寄港を控えている。2017年「日本一周グランドクルーズ」では高雄と、初となる澎湖島へ。

4

台湾のクルーズ発展で、クルーズの選択肢が広がる!?

台湾港務股份有限公司(TIIPC)が主催するアジアクルーズ・フォーラムが、2014年に続き2回目の開催となった。台湾のクルーズ市場の動向から見えるものは、
文：横川ちひろ

2016年7月、台湾・台中でアジア・クルーズ・フォーラムが開かれた。台湾の4港を管轄する台湾港務股份有限公司(TIIPC)が主催し、TIIPCの張志清会長や、ロイヤル・カリビアン・インターナショナル中国・北アジア太平洋地区最高執行責任者のサイモン・ウィアー氏など台湾やアジアのクルーズ市場におけるキーマンや、日本からは商船三井客船の嶋田和芳取締役らが顔を並べた。次々と登壇する面々からよく聞かえてきたのは、「台湾には大きな伸びしろがある」。

ものの、それに続くのが全体の約1割を構成する台湾である。伸びに伸びているアジアの中心に位置する台湾に、発展の可能性を強く感じるのは当然だろう。

いち早く大規模な日本発着を開始したプリンセス・クルーズでも台湾をめぐるコースはいまや定番といえるし、日本船各船でも台湾を訪れるコースは毎年商品に並ぶ。

今年8月に発表されたクルーズ・ライン・インターナショナル・アソシエーション(CIITA)の調査によると、2015年のアジアのクルーズ人口は約208万人(前年比24パーセント増)。2012年以降の年平均成長率40パーセントと、とどまるところを知らない。その約半数を占めるのはもちろん中国。中国と大きく差がある

台湾は、勢いを増す中国市場を獲得することで自国のクルーズ市場の成長を目指す。そのために諸手続きの簡素化やインフラの整備など官民挙げて取り組む姿勢だ。世界のクルーズ船社が続々と中国に配船するなかで、台湾も大型客船対応のバース建設を着々と実行。基隆や高雄では22万トン型客船対応の岸壁と新ターミナルを建設する。近年リゾート地として客船の寄港が増加中の澎湖島もまた同クラス対応の岸壁が2018年に完成予定だ。

現在、その人気の台湾を通過で発着港としているのはスタークルーズの「スーパースター・アクエリアス」(5万1039トン)のみ。せっかく東京から飛行機で約4時間とアクセスが良いのだから、今後台湾発着クルーズが充実すれば長期の休みがとりにくい日本人のクルーズ選定の選択肢も大きく広がるだろう。

クルーズで訪ねる台湾
台湾のクルーズ市場の活性化は日本人にとってもうれしいことだろう。日本発着クルーズにおいても台湾は非常に人気のある寄港地。

中国への配船が増え、これまでにない最新船や超大型船がアジアに就航するようになった一方で、中国発着クルーズに勇んで乗る日本人はあまり多くない。その点、日本人に友好的な台湾から乗れるクルーズの増加は日本のクルーズ市場にも良い流れを生むのではないか。台湾を訪れる手段がより多様になることを期待したい。